王都に生きる滅亡の記憶

士はサムライ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王都に生きる滅亡の記憶

【Ｎコード】

Ｎ１０８４Ｗ

【作者名】

士はサムライ

【あらすじ】

王都近郊の森で複数の惨殺された死体が発見された。調査に訪れた騎士団は、一人の生存者を発見する。森で一体なにが起こったのか、真相を究明すべく騎士レリアは唯一生き残った青年フェリクスと接触するのだが、彼は記憶を失っていた……。

序（前書き）

架空の世界を舞台にしていますが、魔法やモンスターは登場しませんのでご注意ください。

序

昼間の強い太陽の陽射しさえも、無数の木々の葉が遮ってしまう暗い森の中に、目を覆いたくなるような光景が広がっていた。

胃からこみ上げてくる酸をファティウスは喉の奥でぐっとこらえ、目を逸らすなと自分に言い聞かせてから、奥歯を噛みしめた。

目の前に転がる死体のどれもが、生前の顔形がまったく想像できないほど激しく切り刻まれ、裂かれた腹部からは黒く腐食した臓器が引きずり出されている。そのうえ、死体が放置されている間に、この森に住む猛禽類から、肉片を食いちぎられたのだろう、ところどころ骨までむき出しになっている、という惨(むご)たらしさだ。

ファティウスが連れてきた部下の下級騎士たちは、みな鬱蒼と茂った草むらの中に顔を突っ込みずっと嘔吐を繰り返している。これではまったく役に立たない。

「情けない。それで戦場に立つことができるのか、貴様たちは」

小隊長の責務として大声で叱りつけてはみたが、正直、無理もない、と思う。ファティウスは、騎士団の一員として、これまで数々の戦場で剣を振るい、数え切れないほどの死体の山を見てきたが、これほど凄惨で残酷なものは見たことがない。

呼吸をするたびに、強烈な腐乱臭が脳の奥まで押し寄せ、吐き気を誘発させる。ここに到着してから十分以上は経とうかというのに、全身の鳥肌はまだ一向に収まりそうもない。ましてや騎士学校を卒業したばかりで、実戦の経験も乏しい部下たちが、正常でいられるはずもない。

仕方がない、本当は口も利きたくない相手だが、この状況ではそうも言ってられない。

ファティウスは、一人平然と死体の様子をつぶさに眺め回っている女騎士の元へと歩を進めた。

「レリア隊長」

背中から呼びかけられたレリアは、顔だけをファティウスに向けた。鼻筋の通った美しい顔立ちは、これほど凄惨な死体を目の当たりにしても青ざめることさえない。彼女の心臓には毛が生えているとしかファティウスには思えなかった。
「まったくひどいもんですなあ。部下たちは当分使いものになりそうにありませんが、どうします？」
レリアはファティウスよりも四つ下の二十二歳だが、騎士団の階級は彼女の方が一つ上である。ファティウスは十五人の部下を率いることしか許されていないが、レリアは倍の三十人が許されている。現に今回の任務でも、一番の責任者は彼女であるため、ファティウスにとっては忌々しいことだが、上長の指示を仰がないわけにはいかない。
「ほっとけばそのうち慣れるだろう。直に胃の中も空になり、吐くものもなくなるはずだ」
「それまで待機というわけですか」
ファティウスの問いにレリアはふっと鼻で笑った。
「なにも我々までがただ突っ立っている必要もない。辺りを捜索して他に遺体がないか調べるのだ。広範囲に遺体が放置されている可能性もある」
「まあ……そうですが」
ファティウスは露骨に嫌な顔を見せた。遺体の捜索など騎士団では下っ端のやることである。ましてやここは、草木が生い茂る森の中である。いつ草むらから毒蛇の類が飛び出してくるかわかったものではない。それに、奇妙な形をした虫もファティウスはあまり得意ではなかった。
「おい、お前」
レリアは死体を前にして呆然と立ちすくんでいる一人に声をかけた。
「は、はい」部下の男は緊張した面持ちで背筋をピンと伸ばす。
「お前はまだ平気そうだな」

「はい。父が医者をしておりましたから、少しは見慣れております」
「そうか。ならば、急ぎ王都に戻ってこの惨状をアルヴァイン騎士長に伝えてくれ。それと、もう一小隊の応援要請もだ」
張りのある声で命令を伝えると、男は「かしこまりました」と威勢よく叫んで、すぐに駆けだした。
王都近郊の森で、無数の惨殺された死体が発見された、という報せが騎士団の本部に入ったのは今朝早くのことだった。森で猟を営む猟師が獣を追っているうちに偶然見つけたそうだ。報せを受けた騎士長アルヴァインは、すべての遺体の回収を若い騎士二人、レリアとファティウスに命じたのだった。
現場に到着して三十分以上、ようやく気持ちが落ち着き、動けるようになった騎士たちから草むらを掻き分け、遺体を捜す作業が始まった。
先頭に立って積極的に捜索するレリアとは正反対に、ファティウスは後方の獣道から部下たちを「しっかり捜せ」などと怒鳴りつけているだけだった。
無惨な死体が見つかるたびに、「ひっ」や「ぎゃっ」といった短い悲鳴が木々の間をこだました。中には腕や脚がもげている死体も多くあった。
蛆虫が這い、蠅がたかる遺体を抱え上げ、用意してきた荷車に載せていった。鼻が曲がるような悪臭の中、嘔吐を繰り返しながらの作業は困難を極めたが、途中から急遽応援に加わった小隊の助けもあり、日が暮れ始めたころにはなんとか一定の目処をつけることができた。
「よし、最後にあの巨木の四方を捜索すればいいだろう」
レリアは指示棒を使って数メートル先にそそり立つ巨木を指し示した。
最後、という言葉を聞いて周りの騎士たちから安堵の空気が流れる。最後の力を振り絞って、眼前に広がる草藪を掻き分け、木々の間を縫って、目標の巨木へと近づいていく。

「なんてでかさだ」
巨木を間近にして、ファティウスはため息とともに呟いた。幹の太さは周りの木々に比べて数十倍はあるだろう。長い歳月を思わせる凹凸の激しい幹は一見不恰好だが、不思議と見ているうちに、自然が生み出した芸術作品に思えてくる。
呆然としているファティウスの横で、レリアは的確に命令を下していた。まずは周りを虱潰しに捜すため、木を囲む。地面にはところどころに太い根の一部が露出しているためよくよく足元に注意を払わなければ、つまずいてしまう。
二十人がかりで、ようやく囲み終えてから捜索が始まった。全員身体を屈めて、死体はもちろん体の一部や遺品が落ちていないか、慎重に捜した。
「木登りの得意なものはいないか」
レリアの問いかけにファティウスは眉根を寄せた。
「まさか、木の上まで調べるつもりですか」
レリアは首肯する。「この巨木は怪しいと思わないか？」
「いえ、とくには」ファティウスは迷うことなく首を振った。「まさか、この集団を襲った賊どもが金品を隠しているとでも言うんですか？」
がはは、と口を大きく開けて笑った。
「賊？」
レリアは冷たい視線をファティウスに向けた。彼の笑いがぴたりと止まる。
「そうか？　わたしには到底そうは思えん」
静かな口調だが、その言葉には自信が満ちている。それを聞いて、ファティウスはひどく顔をしかめた。
――だから、お前は小隊長どまりなのだ。
と、小馬鹿にされたように聞こえたからだ。腹の底が沸々と熱くなった。
「ならば、レリア隊長のご意見を浅はかなわたしにご教授してもら

いたいもんですなあ」
怒りを抑えながら挑発的に言ったが、レリアは意に介しないとばかりに、淡々と答えた。
「遺体を発見しながら、次第に我々は森の奥まで入っていき、ここまでたどり着いたのだ。意図的にこの巨木まで誘われた、と考えられないか？」
「むう」とファティウスは唸りながら腕を組んで、巨木を見上げた。高さは二十メートル以上あるだろうか、幹からは幾本もの枝が空高く伸びている。ここに誘われた、と考えると異様に不気味なものに見えてきて、一瞬背筋に冷たいものが走った。
「まあ、考えすぎだとは思いますが、レリア隊長の考えはよくわかりました」ファティウスは組んでいた腕を解いて「おい、すぐに木に登って隅々まで調べろ。鳥の巣一つ見逃すな」と大声で傍らにいた部下たちに命令した。
騎士になり立ての部下たちとはいえさすがに厳しい騎士学校を卒業しただけのことはある。運動神経と腕力の強さは抜群で、ごつごつした幹の窪みに手足の指を食い込ませて、器用に登っていく。その光景をレリアはただ黙って見上げていた。
やがて、木の裏側から声が上がった。
「ひ、ひとが、人がいます！」
レリアは声に反射するように駆けだした。遅れてファティウスもレリアの背中を追う。馬に乗るのは得意なファティウスだが、走るのは大の苦手だ。彼女の背中は遠ざかっていくばかりで、ようやく裏側へたどり着いたころには、レリアはなんと木を登り始めていた。
部下たちのような軽装備とは違って、彼女は全身に鎖帷子をまとったうえに、鉄製の胸当てを装備し、脛部分は板金で覆っているのだ。とてもあんな太い木の幹を登るなんてできるわけがない。だが、レリアは不恰好に脚を開き、腕を伸ばして、枝の上にいる部下たちの手を借りながら登っていった。
ファティウスは歯軋りした。部下たちに助けを乞うてまで木登り

をするなど、彼のプライドが許さない。隊長とは、後方から部下に命令を下すものなのだ。
「えーい、どうなってるんだ。しっかり報告しろ」
八つ当たりするようにファティウスは叫んだ。
「うるさい、貴様は黙ってろ！」
雷音にも似たレリアの一喝が降ってきた。
びくりと肩を震わせたあと、ファティウスのこめかみの血管がくっきりと浮かび上がる。「なんだとこの野郎！」と喉の寸前まで出かかったが、必死にこらえた。上長に罵声など浴びせようものなら、騎士団の規則による厳罰は免れないからだ。
「レリア隊長、ここです。この窪みを見てください」
縦に大きく割れた幹の窪みに何かが挟まっているようにレリアには見えた。
「火を」
辺りはもうすっかり暗くなっている。挟まっているのは本当に人なのか、この暗さではまだ判別できない。
急ぎ用意されたランタンがレリアに手渡される。彼女は目線の位置までランタンを掲げて、窪みの中を照らし、目を凝らした。
幹の色に同化するように、カーキー色の布地が見えた。おそらくマントだろう。レリアはランタンの位置を上下に変え、その全体を観察した。
頭はすっぽりフードを被り、全身をマントでくるむようにして、窪みの中に身体を押し込んでいる。
「わたしはアスキア騎士団中隊長のレリアだ。わたしの声は聞こえるか、聞こえるなら返事をしろ」
マントに向かって呼びかけたが、何の反応もない。すでに息絶えているのだろうか。
窪みの入口は、腕一本がやっと入るほどの幅しかないが、どうやら奥で広がっているようだ。
レリアはランタンを部下に持たせ、自ら窪みの中へと腕を突っ込

んだ。
思ったよりも窪みは深い。レリアは顔が歪むほど腕を目一杯に伸ばした。指先が微かにマントに触れ、同時に肌の感触を感じた。
生きているかどうかはわからない。しかし、まだ腐敗はしていないようだ。
レリアは腕を引き抜くと、周りの枝の上で状況を見守っていた部下たちのほうへ体を向け直した。
「中のものは間違いなく人間だ。生死は不明だが、生きているものと仮定し、傷つけぬよう外に出してやれ。いいか、絶対に傷つけるな」
険しい表情だった。それに押されるように「はい」と緊張した声が返される。
足元の枝は太く、安定しているとはいえ、窪みに近づけるのは一人だけだ。さすがに腕力自慢の騎士たちといえども、一人で引きずり出すのは不可能と判断し、斧を使って慎重に幹を削ることになった。時間はかかるが仕方がない。
もし、生存者なら――騎士団が長年追い求めていた情報が得られるかもしれない、と地上に降りたレリアは考えていた。
ファティウスに周りの警備を任せ、レリアは作業が進むのをじっと待った。
夜明け近く、声が上がった。
「隊長、出ました！　意識はありませんが、生きているようです！」
レリアはきゅっと唇を引き結んだ。

(1)

――名前は？

そう訊かれた気がしたが、頭がやけに重くて、はっきりわからなかった。

「自分の名前だ、わかるか？」

もう一度訊かれて、今度ははっきりと質問を理解したが、答えようにも肝心の言葉が出てこない。まるで思考することを脳が拒否しているようだった。

目の前にいる黒髭をたくわえた男は「うーん」と唸って首を傾げてしまった。

「ここは……？」

こちらから訊くと男は「医療所だよ」と即答してくれた。

医療所……そうか、それで今自分はベッドの上にいるのか、と得心がいった。周りに首を巡らせると、向かいにもベッドが二台並んでいて、右隣りにもベッドがある。だが、どれも空いていて自分以外に患者はいないようだ。窓からは、眩しい太陽の光が降り注いでいて、まともに目を開けていられず、すぐに窓から目を逸らした。

ここは南向きの部屋なのだろうか。

「安心しろ。君を監禁しているわけじゃない」

落ち着きなくきょろきょろしていることを制するように黒髭の男は言った。

口髭のせいか老けて見えるが声の調子は若い。髭の色とは対照的に真っ白なローブを着ていることから、どうやらこの男は医者のようだ。

「なぜ、わたしはここに？」

「それは、自分の体に訊いてみな」

ぶっきらぼうに言われて、少しむっとしながら自分の手に視線をやった。

手首から肘まで包帯が巻かれているだけではなく、胸から腹部にかけても同様だった。自分はとんでもない大怪我を負っている、と認識した途端、体中に痛みが走り始め、起こしていた上半身をたまらずベッドに倒した。

その様子がおかしかったのか、男は、はっはっは、と笑いながらポケットの中に手をやると、中から羊皮紙を取り出して、声に出して読み始めた。

「全身の切り傷三十六カ所、そのうち十二カ所の化膿がひどく、切開して膿みを除去した後に縫合。また、絶食による体力低下が著しく、術後も非常に危険な状態にあり」

そんなに酷かったのか、とまるで他人事のように聞いていたら、男が顔を覗きこんできた。

「聞いたらもっと痛くなったんじゃないか？　でももう大丈夫だ」と白い歯を見せて、にんまり笑った。

痛む腹部を気遣いながら、再び上半身を起こしてから「ありがとうございました」と言って、丁寧に頭を下げた。

「まあ、俺は自分の仕事をしたまでだ。君の体に生きたいという執念があったからこそ助かったんだ。他の仲間の分もしっかり生きてやってくれ」

――他の仲間……？

意味がわからず、眉を寄せていると医者は少し難しい顔をした。

「ああ、記憶のほうはもうちょっと時間がかかりそうだな」

そうか、やっぱり記憶がなくなっているんだ。それで、さっきから何度自分の名前を口にしようと思っても出てこないわけだ。

そっと右手を頭にやると、額から後頭部にかけて、ここにも包帯が巻かれていることに気づいた。

「まあ、そんなに心配するな。包帯がとれるころには、全部思い出すだろうさ」

医者はあっけらかんと言うが、自分の名前さえ思い出せないなんて、相当な重症ではないのだろうか。心配するなというほうが無理

だろう。
「そうですか……」
力なく頷いたとき、入口のドアが開いて、別の男が入ってきた。白いローブを着ているから、この男も医者なのだろう。
足早にこちらに向かってくると、二人の医者はこちらに背を向けて、なにやら小声で話し始めた。それから一分もしないうち入ってきた男は、また足早に部屋を出ていった。
「なにかあったんですか？」
訊ねると、医者は肩越しに振り返って「まったく耳が早いもんだ」とぼやくように言ってから、早口で説明を始めた。
「騎士団の隊長が君にいろいろ訊きたいことがあるそうだ。至急、本部まで来るように、とさ。そういうことだから、急いで準備するぞ。そうだ、覚えておくといい、ここ王都では騎士団に逆らっては生きていけないことを」
――王都……騎士団……。
突然、頭がひどく痛んだ。

（2）

医者と一緒に医療所の外に出ると、馬車が用意されていた。幌には、前脚を上げて立ち上がっている馬のシルエットが描かれている。

「すごい待遇だな。まさか、騎士団が迎えを用意してくれるなんて」

医者は目を丸くして言った。

これがどれだけ特別なことかわからないが、歩くたびに頭がふらふらする今の状態ではとてもありがたい。

広い街路の真ん中に敷かれた石畳の上を馬車は走った。さすが王都ということだけあって、様々な店が軒を連ね、行き交う人々で賑わっている。

やがて、高い塀に囲まれた壮大な建物が目に入ってきた。四方に十メートルを超える高さの塔がそびえ立ち、見張りが付いている。

ぽかんと口を開けて眺めていると、

「あれが王城だ。騎士団の本部は、城の中に設置されてある」

と、医者が教えてくれた。

近づいてわかったが、城の周りは壕が掘られているが、ずいぶん水位が低くて、一部は底が露出している。城は立派なのに、壕の作りの中途半端さに違和感を覚えた。

橋を渡って、人の背丈よりも遥かに高い門の前で馬車は止まった。車を降りると、すぐに腰に剣を提げた一人の男が歩み寄ってきた。胸元には幌と同じ馬の模様が刺繍されている。どうやら、これが騎士団を表す紋章のようだ。

「医療所から来たものか？」

医者がそうですと答えると「ついてこい」と言って、さっと踵を返し、こちらの反応を一切確かめることなく歩き始めた。二人は慌てて背中を追った。

騎士の後を付いていくまま、城内を歩き、長い廻廊を渡った先に騎士団本部はあった。石レンガを組んだ立方体の建物で、入口には

やはり馬の紋章が描かれているが、それ以外の壁面には装飾など一切なく、武骨さを感じさせる。
通されたのは、中央に机と椅子が置かれてあるだけの小さな部屋だった。
「ここで待て。すぐにレリア隊長がお見えになる」
案内役の騎士はそれだけ言うと部屋を出ていった。
「まったく愛想ってもんを知らんのか」
不満げに言った医者を横目で見ると「おっと、今のは聞かなかったことにしてくれ」と肩をすくめて、おどけてみせた。
間もなく、ドアの開く音がして、二人は振り返った。
部屋に入ってきたのは、金髪の若い女性で、二人を交互に一瞥してから「ご苦労」と言った。
――この人がレリア隊長……？
にわかには信じられなかった。身長は女性にしては高いほうだろうが、体の線は細い。それになんといっても、息を呑むほどの容貌の美しさだ。血が飛び交う戦場に、こんな美人が参戦しているとは思えなかった。
「発見から三日でここまで回復したか。さすがにいい腕をしている。よくやってくれた」
医者は背筋を伸ばして、
「お褒めいただき光栄であります」
と、わざとらしいくらい大声で言った。
「記憶を失っていると聞いたが、本当か？」
「はい。自分の名前さえも記憶していませんが、言語ははっきりしています。記憶の喪失は、事件のショックによる一時的なものと思われます。稀に起こる事例でもありますし、傷の回復とともに、いずれ記憶も取り戻すものと思われます」
まるで用意していたかのように、医者は朗々と言った。
レリアは顎を引いて、少し考えてから口を開いた。
「どれくらいかかる？　目安はないのか」

医者は一瞬困った表情を浮かべたが、すぐに引き締め直して答えた。
「正直お答えできかねます。ただ、なにか一つを思い出すことで、それがきっかけとなりすべてを思い出す可能性も十分に考えられます」
「わかった」レリアは頷いた。「ご苦労であった。お前は外で待て」
医者は「はい」とまた大声で返事をして、背筋を伸ばしたまま部屋を出ていった。
騎士の前では、あれほど身体を強張らせて大声を出さなければならないのだろうか。それほど、騎士とは、威厳があり敬意を示さなければならない存在なのだろうか。
そんなことを上の空で考えていると「まずは座れ」とレリアから着席を促された。
「はい！」と返事に力を込めようかと一瞬迷ったが、声が上擦ってしまいそうでやめた。結局、言われたまま無言で椅子に浅く腰かけた。
「調子はどうだ？　ずいぶん痛々しい姿だが」
「はあ……」どう答えようか躊躇ったが、ありのまま答えることにした。
「傷が痛くて、歩くのもけっこうしんどいです。それに、頭が重くてなんだか波にもまれているような感じがします」
「まあ、それも仕方あるまい」レリアは机を挟んで正面に立った。「我々がお前を発見したとき瀕死の状態だったのだ。それが、三日で意識を取り戻すとは、正直こちらが驚いているくらいだ」
レリアは淡々と言った。
「発見された……って、あの、わたしは一体どこにいたんですか？」
「森だ」
「森？」
自分でもびっくりするくらい声が裏返えってしまった。
「古の森。忌まわしき森。祟りの森。呪いの森。呼び名はいくらで

もある」
「どれも物騒な名前ばかりですね」
ははは、と冗談っぽく笑ったが、レリアは少しも表情を崩さなかった。
「わたしはそんな物騒な森の中で遭難していたというわけですね」
「違う」
レリアは斬り捨てるように否定した。その語気の強さに思わず尻が浮きかけた。
「身を隠していたのだ。お前たちを襲った何者かから逃れるためにな」
「お前たち？　襲われた？」
思わず眉間に皺が寄った。そういえば、医者も仲間たちがどうとか言っていた。すると、集団でいるところを襲われ、森の中に隠れることで命からがら助かった、ということなのだろうか。
レリアは入室したときから右手に持っていた一冊の分厚い本を机の上にぽんと置いた。
ひどく汚れているせいで、表紙の印字がところどころかすれてしまっている。なぜこんな本をレリアが持っているのか、実は最初から不思議に思っていた。
「これがなんだかわかるか？」
「さあ……」首を捻りながら目の前に置かれた本をそっと手にした。傷みが激しく文字通りぼろぼろだの状態だ。一ページめくっただけで、一気に抜け落ちてしまうのでは、と怖くて表紙だけをまじまじと見つめた。大きな太字で文字が並んでいる。おそらくこの本のタイトルだろう。一部消えてしまっている文字は、前後の綴りから想像してみた。
おかしなものだ。自分の名前さえ思い出せないというのに、文字は推測までできるなんて。
「なにがおかしい？」
レリアの冷たい視線を受けて、「いえ、なんでもありません」と

慌てて頬の筋肉を引き締めた。もう一度、表紙に書かれた文字の解読を試みる。

――アルキア最高学問所　建築術指南

と読めた。

つまり、これは建築を学ぶための教本ということなのだろうか。

「この本をお前は、自分の命よりも大事そうに腕の中に抱えていたのだ」

「わたしが……これを」

視線を宙空に向けたそのとき、目の前に閃光が走った。部屋の景色がねじ曲がり、瞳が次から次へと様々な場面の像を結んでいく。まるで別世界に放り込まれたようだった。自分がいまどこにいるのか、立っているのか座っているのかさえもわからなくなり、そして恐怖が全身を襲った。

がたがたと体が震えだし、全身の毛穴に粟を生じた。かたく目を閉じ、両手で体を抱え込むようにして丸くしたが恐怖は収まらなかった。額から大量の汗が流れ落ち、呼吸はぜえぜえと音を立てなければならないほど荒い。鏡で見なくてもわかる、顔は血の気が引いて真っ青なはずだ。

「どうした、なにか思い出したか？」

まるでこうなることを見越していたかのようにレリアの口調は至って冷静だった。

「み、水を」

喉の奥から絞り出すようにしてなんとかそれだけ言えた。

レリアは部屋のドアを開けると、入口に控えている騎士に水を持ってくるように命令した。

すぐにコップ一杯の水が運ばれ、机の上に置かれた。それを震える両手で持ち、こぼさないように慎重に口元まで運ぶと、あとは一気にごくごくと喉を鳴らして飲み干した。水が胃に落ちていき、わずかだが清涼感が生まれる。縮こめていた体を机の上に突っ伏させて、呼吸を整えようとゆっくり息を吸って、吐き出した。

「どうやら少しは落ち着いたようだな」
観察するかのようにじっと見ていたレリアが静かに言った。たしかに体の震えはほぼ収まり、呼吸もずいぶん楽になった。
むくりと体を起こして、椅子の背にもたれかかった。薄目を開けると、目の前にレリアの顔があった。彼女は机の上に伸ばした右手を支点にして身を乗り出し、さらにぐっと顔を近づけてきた。青みがかった、なんて冷たい瞳をしているのだろう。
「さあ言え。お前は誰だ？　森でなにがあった？」
レリアの脅迫するかのような物言いに、思わず背もたれいっぱいに仰け反った。なにからどう説明すればいいのだろう。必死に頭の中を整理しようとするがうまくいきそうにもない。ただ、最初に言うべきことだけはわかっている。
そっと、慎重に口を開いた。
「わたしの名前は、フェリクス。フェリクス・ロスターです」
それを聞いて、レリアは小さく頷いた。

（3）

今年十八歳になったフェリクスのもとに王都より留学許可状が届いた。歴代の国王たちはみな教育に熱心で、毎年国中から優秀な若者たちを留学生として王都に呼び集めていた。フェリクスの秀才ぶりも王都まで知れ渡り、ついに念願の留学生の一人に選ばれたのである。

留学生たちは、アルキア最高学問所で三年間学んだ後、国の中枢で働くことを約束されている。現在高位に就いている官僚たちのほとんどは、最高学問所の出身であることからも、留学生に選ばれることが、エリートへの登竜門であることに違いなかった。

こうして、フェリクスは国の東部から集められた留学生団の一員として、生まれ育った町ロスターを三月下旬に出立したのだった。

ロスターはアルキア王国東部に位置する港町で、名前の由来は代々ロスター家が領主を務めていることにあり、現在はフェリクスの父が七代目の領主に就いている。領主の子息として、学問に打ち込めるだけの裕福な家庭に育てられたこともフェリクスにとっては幸運だった。

ロスターから王都までは運河を船で七日、徒歩で一日という旅程のはずだった。ところが、昨年から続く干ばつの影響で、運河の水が一部干上がり、早くも三日目からは、残りを陸路で向かうことになった。しかし、陸路は運河に比べてかなり危険だ。留学生たちはみな裕福な育ちで身なりも良いため盗賊たちにとって恰好の標的になり得るからだ。

そのため、護衛として傭兵を五人雇うことになった。費用はかかるが、二十人を超える留学生団が無事に王都まで辿り着くためには仕方がなかった。

傭兵たちのお陰か、旅の途中、盗賊に襲われるなど危険な目に遭うことはなかった。しかし、一つ大きな問題が生じていた。それは、

大幅な日程の遅れだった。
長旅に慣れていない留学生たちの足では、学問所の入所日までに王都に到着できないことが決定的になったのだ。留学生たちの顔には疲れの色が濃く表れ、一日に進める距離はどんどん短くなっていた。傭兵を雇ったこともあり、馬を買う金は残っていない。二、三日の遅れならばそう問題ないだろうが、このまま旅を続けていたのではいつ到着できるのか、まったく目処がつかない状態にあったのだ。
アルキア王国の中央には、南北に広大な森が広がっている。あまりに深い緑は、太古の昔より人の足が踏み入ることを拒み続け、大部分は未開の地のままである。初代国王アルキアは、未開の森を開拓するのではなく、大陸を横断するマズル河を運河に造り上げることで、王国内の移動を容易なものにしたのだ。これにより、他国からも工商人たちが王国を訪れ、経済は発展していった。しかし、完成から約百年経った今、運河は危機を迎えていた。昨年からまとまった雨が降らず、水位がどんどん低下し、ついに船は身動きがとれなくなってしまったのだ。王国の人間から見れば、この忌まわしい森を百年ぶりに北側から迂回しなければならなくなったのだ。
だがこの森、たしかに南北には数百キロに及ぶが、横幅はせいぜい二十キロ程度と目されていた。横に突っ切ることができれば、もう王都までは目と鼻の先だ。
なんとか森を突っ切る方法はないものかと、留学生たちは模索したが、オークやトロルなど異形の怪物たちが跋扈（ばっこ）すると噂される森を踏破できるはずもなく、夢物語にすぎないはずだった――王国側から森を抜けてきた男がこの町にいる、という思いがけない情報が入ってくるまでは。
情報の提供者は料理屋の主人だった。真剣に悩んでいる留学生たちの会話を耳にして、親切心から口を挟んできたのだ。
すぐに、男が滞在している宿屋を聞き出して、団の代表者二名が訪ねた。いくら要求されるのか、想像もつかなったが有り金すべて

を提示することは全員の合意で決まっていた。
事情を説明すると、男は意外にも、ちょうどここでの仕事が終わって王都に帰るところだから金などいらない、と言って快諾してくれた。これを聞いた留学生団の喜びようは名状しがたいほどだった。
翌日、夜明けとともに留学生団は出発した。昼前には男を先頭に森の中に入っていった。それが悲劇の始まりとは知らずに――。
「王都から森を抜けて来たという者は、間違いなく男なのだな？」
それまで黙って話を聞いていたレリアが突然口を挟んできた。
「は、はい」フェリクスは戸惑いながらも小刻みに二度頷いた。
「どんな男だった？　顔や服装になにか特徴はなかったか？」
「それが……」
フェリクスは、鬼気迫るレリアの眼差しから逃れるように目を逸らして、呟くように言った。
「どうしても男の顔が思い出せないんです」
「歳はどうだ。若いか老いていたか」
フェリクスは首を横に振った。
「だめです。顔全体に黒い影が差していて、まるでわかりません。ただ、男であったことははっきり憶えています。それに、鳶色のマントを身に着けていたことも」
「顔の記憶がないのに、なぜ男だと言い切れる？」
「一つは身長です。わたしよりも頭二つ分は大きく、女性にしては背が高すぎます。それともう一つは……」
フェリクスは一度言葉を切って、唾を飲み込んだ。
「声を憶えているんです。『メフィス人だ。逃げろ、殺されるぞ！』と男は何度もわたしたちに叫びました」
「メフィス人だと！」
突如レリアから胸元を掴み上げられ、フェリクスの体が宙に浮いた。彼女の細い腕からはとても想像できないほどの力の強さ。だが、それよりもフェリクスを驚かせたのは、これまでほとんど感情を表に出すことのなかったレリアが、目を血走らせ、下唇をぶるぶると

震わせていることだった。
――く、苦しい。
レリアの両手にはますます力が込められ、フェリクスの首を圧迫した。「ぐっ、ぐ、ぐ……」苦しみを訴えるフェリクスの呻き声に気づいて、彼女はようやく手の力を緩めた。すとんとフェリクスの臀部(でんぶ)が再び椅子の上に落ちた。
レリアは軽く目を閉じてから気持ちを落ち着かせるように静かに一つ息を吐いた。
「話の腰を折ってしまった。すまないが、森に入ったところから聞かせてくれ」
「はい」と答えようとしたが、げほげほと激しく咳き込んでしまい、声にならなかった。
「もう一杯、水を用意させるか？」
「いえ、大丈夫です」
フェリクスは目にたまった涙を拭った。
「森の中は暗くて、見上げても陽の光を感じることもできませんでした。生き物たちは、息を潜ませているかのように一切姿を見せず、鳴き声一つ聞こえませんでした。静かすぎるのが却って不気味で、全員が恐怖と不安を感じていたはずです。しかし、今さら引き返すわけにもいかず、わたしたちは黙って歩き続けました。三時間ほど歩いたころでしょうか、いよいよ森の中は真っ暗になりました。男の指示により、わたしたちは縦一列になって、はぐれないようにお互いに手を繋いで歩きました。底なし沼があるから少しでも道を逸れるな、と男は言うのです。もう怖くて怖くて仕方がありませんでした。やはり、素直に森を迂回するべきだったのでは、と誰も口に出さずとも後悔の空気が留学生団を包んだときでした、目の前にぽっかりと大きな口を開けた洞窟が現れたのです」
洞窟と聞いて、レリアの片眉が僅かに動いたが、フェリクスの言葉を遮ることはなかった。
「男は言いました。この洞窟を抜ければ、王都はすぐそこだ、と。

それを聞いて、わたしたちは一様に安堵の息を漏らしました。早速、ランタンに火を灯して、洞窟の中に入っていきました。洞窟の中は、ヒンヤリとした空気が流れていて、天井からはぽたぽたと水が滴り落ちていました。そのせいか足元はつるつる滑りやすく、慎重に進む必要がありました。しかし、男だけはよほど歩き慣れているのか歩く速さはほとんど変わらず、わたしたちは男の背中を必死に付いていきました。そして、洞窟を抜けた先は、深い霧に包まれていました。まさに一難去ってまた一難という気分でした」

フェリクスはここまで話すと、机に両肘を突いて頭を抱え込んでしまった。

「どうした。頭が痛むのか？」

「ここから記憶を辿ろうとすると、体が言うことを利いてくれないんです」

フェリクスの額には再び大粒の汗が生まれ、膝が震えていた。

「たとえ忌まわしい記憶でも逃げるな」

フェリクスはゆっくり頷いた。

「わたしたちは、構わず霧の中にも突っ込みましたが、すぐに後方から悲鳴が聞こえてきたんです。わたしは振り返りましたが、手を繋いだすぐ後ろの仲間の顔さえ霧で見えません。それから続けざまに今度は前方から悲鳴が起こりました。その後は、もうなにがなんだか……繋がれていた手は離れ、『メフィス人だ、逃げろ』と何度も男の叫び声を聞いたのは憶えています」

「つまり、霧の中でお前たちを襲った者たちや、自分がどうやって逃げ延びたのか一切憶えていないのだな」

フェリクスは力なく頷き、そのまま顔を俯かせた。

レリアはゆっくりとフェリクスに背中を向けた。翻ったマントの裾が微かに揺れ、部屋の中はしばらく静寂に包まれた。

「悲鳴が起こったのは、洞窟を抜けてすぐだったのだな？」

レリアからの静かな問いに、フェリクスは慎重な物言いをした。

「おそらくそうです。曖昧な記憶ではありますが、霧の中を歩いた

のは、ほんの数分かと……」
「そうか」レリアは背中を向けたまま顎に手を当てて何度か頷いた後、さっと体を向け直した。マントが大きく翻った。
「最後に一つだけ訊きたい。緑の眼を見なかったか」
「緑の眼……」
フェリクスは記憶の中を探ったが、結局は頭を横に振った。
「わかった」レリアは懐から巾着袋を取り出した。「これは見舞い金だ。治療費と今後の学費にでも当てるが良いだろう」
レリアがそれを逆さにして振ると、中から十枚の銀貨が机の上に散らばった。かなりの大金だ。いまの自分が無一文であることは容易に想像がつく。フェリクスは思いつく限りのお礼の言葉を述べて、銀貨を受け取った。
「あの、一つ訊いてもいいですか？」
部屋を辞す直前、ドアの前でフェリクスは立ち止まった。
「他のみんなはどうなったんですか？」
「……遺体で見つかった。ただ腐敗と損傷が激しくて身元の確認にはまだ時間がかかりそうだ」
「そうですか……」
フェリクスは肩を落とした。
「仇は必ず討ってやる」
レリアの力強い言葉に、フェリクスは「お願いします」と頭を下げて、部屋を出た。
階段を下りて廊下を進み、あと数歩で騎士団本部を出ようかというところで、フェリクスの右肩にずしりと重みがかかった。目だけを肩に移すと、巨大なごつごつした手が載っていた。
恐る恐るフェリクスは手の主のほうへと振り返る。そこには、二メートルはあろうかという筋骨隆々の大男が不敵な笑みを浮かべていた。
「ひっ」思わず悲鳴を上げてしまい、慌てて口元を手で押さえた。恰好からして、この男も騎士であることは間違いない。

「帰る前に、ちょっと俺にも付き合ってくれないか？」
男は、えらの張った四角い顔をぐいっとフェリクスに近づけた。体もでかければ、顔の大きさも常人離れしている。
「なあに、たいしたことじゃない。レリア隊長に話したことを俺にも話してくれればいいだけだ」
男がにやりと口角を上げると、フェリクスの肩に痛みが走った。男の指が肩の肉に食い込んでいる。
フェリクスは痛みに顔を歪ませながら何度も頷いた。断る、という選択肢がフェリクスに用意されているはずもなかった。
二度目となると、レリアに話したときよりもうまく話せたとフェリクスは思った。ただ、洞窟を抜けた後の記憶はどうしても甦らなかった。話し終えた後、騎士の大男から念を押すように訊ねられた。
――襲われたのは、洞窟を出た直後なのか、と。
レリアもその部分を気にしていた。それに対して、フェリクスはもう一度慎重に考えてから「そう思う」と答えた。最初の悲鳴が上がったのは、洞窟を抜けて十分も経っていなかったはずだ。
男はフェリクスの答えに満足したようにまた口元だけで不敵に笑った。

自室のドアがノックされ、レリアは「入れ」と命じた。「失礼します」と部下の男は一礼して、一歩部屋に入った。
「どうした？」
「ファティウス隊長が、部下を率いて森へ向かったようです。先日起こった留学生団の遺体の再調査が目的かと思われます」
ふっとレリアは鼻を鳴らして、椅子から立ち上がると窓際へ歩を進めた。
騎士団本部のレリアに与えられている三階の部屋からは王都の街並みがよく見える。王都中央に連なる大路を、ファティウス隊と見られる一団が、ちょうど郊外のほうへと馬を飛ばしていた。
「相変わらずどうしようもない筋肉馬鹿だな」

レリアは目を伏せて呆れたように首を左右に振った。
「この任務の責任者はレリア隊長にあるはずです。ファティウス隊長の勝手な行動を騎士長に報告するべきではないでしょうか」
「放っておけ。どうせ無駄骨に終わるだけだ」
レリアの言った通り、ファティウス隊はなんの成果も上げられないまま、深夜遅くに帰還したのだった。

（4）

王都アルキアは、四方を高さ五メートル弱の城壁に囲まれた都城である。碁盤目状に幾本もの道が整備され、王侯貴族ら富裕層が暮らす区域と農工商人ら平民層が暮らす区域がはっきりと分けられている。また、国王や重臣たちが政治を行うアルキア城は街の中心を南北に走る大路を最北まで上ったところに構えており、上階からは王都全体を見渡すことができる。

王国全土から優秀な学生が集まるアルキア最高学問所は城から東へ約五キロ、王都の最東端に置かれている。

学問所には、医学、言語学、地理学、建築学、天文学、歴史学、哲学といった様々な分野の学術研究が行われ、それらを助ける膨大な資料を所蔵する図書館も併設されている。ここでは、常時五百人以上の若い学生たちが様々な学問に日夜励んでいる。

新入生が入所するのは毎年四月の初めと決まっているのだが、フェリクスは怪我の治療のため他の新入生たちからは十日遅れて、初めて学問所に通えることになった。

それでもまだ抜糸できていない箇所もあるが、よほど激しい動きをしない限りはなんの問題もないところまで回復した。

早朝、フェリクスはこれまでお世話になっていた医療所を出た。今夜からは、学生寮が当てられるはずだ。

広い王都だから道に迷わないか心配だったが、学問所へ近づくにつれ、いかにも学生風の聡明な顔をした若者たちの姿が多く見られるようになった。みな足早に同じ方向へと歩いている。この人たちに付いていけば、とりあえず辿り着けそうだと一安心した。

やがて、橙色のレンガで作られた時計台が視界に入ってきた。医者が教えてくれた学問所のシンボルとはあの時計台のことだな、とフェリクスは思った。王都で働く医者は全員が学問所の卒業生ということもあって、ベッドに横になっているだけで、時間を持て余し

ているときに、いろいろなことを教えてくれた。なんでもこの時計台は、日の出とその日太陽が最も高い位置に昇ったとき、そして日没のときの計三回鐘が鳴らされるらしい。ここから遠い医療所にも鐘の音は微かに聞こえていた。

学問所の門をくぐったフェリクスは、まず教務棟と呼ばれる建物を探した。ところが、敷地内にはいくつもの建物が点在していて、どれがなんだかまったくわからない。

案内板なども見当たらず、しかたなく、近くを歩いていた適当な学生に声をかけた。訊くと、学生はかったるそうにすぐ近くの建物を指差した。

「ありがとうございます」フェリクスが礼を言って、頭を上げたときには、学生の姿は遙か遠くにあった。まあ、朝の講義が始まる前だから急いでいたのだろうと納得して、学生が指差した横に広い真っ白な建物に足を向けた。

三日前のことだった。医療所で治療を続けているフェリクス宛に一通の封書が届いた。差出人は、アルキア学問所副所長シャーロックと書かれていた。

副所長自ら手紙をよこすなんて、フェリクスは不安に思いながら文面に目を通した。そこには、あと五日以内に入所できなければ、残念だが入所の許可を取り消さなければならない。必ず可否をすぐに返信するようにという内容が簡潔に書かれていた。

読み終えたフェリクスの額に冷や汗が浮かんだ。森で何者かに襲われ大怪我をし、記憶まで失った挙げ句、学問所に入所できないなんてたまったものじゃない。彼にしてみれば、こんな封書が届く前から一日でも早く学問所に通いたかったのだが、医者が許可してくれなかった。騎士団本部に赴いたのは特別で、安静にしていなければ傷口が開くおそれがある、と言うのだ。それに、記憶が今だに戻らないことも危惧されていた。故郷の思い出や両親の顔さえも思い出せないでいた。しかし、そんなことになりふり構ってはいられない。フェリクスはすぐに手紙の内容を医者に伝えたが、それで

も医者は簡単に首を縦に振らずに、結局今日まで三日間待たされてしまった。
「待ちなさい。ここは、学生の入場は許可されていない」
建物の中に入ってすぐ、腰に剣を提げた中年の男が、フェリクスの前に立ちはだかった。下っ腹の出たでかい図体をしている。おそらくここの警備を任せられているのだろう。
「おはようございます。わたしは、フェリクス・ロスターという者ですが、シャーロック副所長のお部屋はどちらでしょうか？」
今日から入所することは、昨日医者を通じて手紙で伝えてあるはずだから心配する必要はないはずだ。しかし、男からあからさまに不審な目つきで睨(ね)め回されるのは気持ちがいいものではなかった。
男は脇にある小机の中から台帳のようなものを取り出し、ぱらぱらとめくると、ふむと一つ頷いた。
「所持品を確認させてもらう。手を横に広げなさい」
なにもやましいことはないのだが、フェリクスは緊張しながら両手を水平にした。男はフェリクスの体を上から下へとぱんぱんと叩くように隈なく触ってからまた納得するように頷いた。
「よし、行っていいぞ。副所長のお部屋は二階に上がって右の突き当たりだ」
「ありがとうございます」
フェリクスは適当に頭を下げて、そそくさと正面の階段を昇った。
シャーロックの部屋の前で立ち止まり、一度深呼吸をしてから木目の美しいドアを二回ノックした。すると「入りたまえ」と中から返事があった。
フェリクスはドアを押し開けた。
「おはようございます。フェリクス・ロスターです。入所が遅れましたことをお詫びいたします」
「君がフェリクス君か。ようこそアルキア最高学問所へ」
シャーロックのしわがれた声が入室したフェリクスを迎えた。
「いつまで頭を下げているんだね。さあ、そこにかけたまえ」

フェリクスは頭をゆっくり起こした。シャーロックは額の広い白髪頭のすらりとした老紳士だった。
「体はもう大丈夫なのかね？」
「はい。すっかり癒えました」
フェリクスは椅子に腰かけながらも意識して声を張った。？心身共に健康であること？が入所の条件であることをこれまた医者から聞かされていた。ここで、少しでも不安に思われては入所を取り消されるかもしれない。それだけは絶対に避けたかった。
「それはよかった」シャーロックはにこやかに微笑むと「これはわたしからの回復祝いだ」と言って、分厚い本をフェリクスへ差し出した。
「これは……」本を受け取ったフェリクスの言葉が詰まった。彼が瀕死の状態でも離さなかったという『建築指南術』の新本だった。
「レリア隊長から聞いたのだよ。これがないと講義を受けるうえでも不便だろう」
「ありがとうございます」フェリクスは目を輝かせて深々と頭を下げた。この本がいかに高価なものか知ったとき、もう手に入れることを諦めてしまっていた。それだけに喜びはひとしおで、しばらく手の震えが止まらなかった。
シャーロックはそんなフェリクスの反応をいっとき楽しんでから彼の真向かいの長椅子に腰を下ろした。
「さて、フェリクス君。ここからが本題だが」
「はい」
フェリクスはようやく本から目を離して、シャーロックのほうに居住まいを正した。
「君は建築学に興味があるようだが、ここではなにを学ぼうが、すべて各自の自由であり、我々が強要することもない。君が建築学を究めるうえで必要だと思うものを数ある講義の中から自分で取捨選択しなさい。もし、地理学や天文学のある分野が建築を学ぶうえで役立つと思うのならば、その講義を受ければよろしい」

「あの、どこでどんな講義が行われるかは事前に知らされるのでしょうか」
「原則三日前に中央棟の一階で公表されることになっているから毎日欠かさず見ておくといい。医学に関するほとんどの講義は、受講希望者が殺到して部屋に入りきれないこともしばしばある。何時間も前から部屋で待機している学生もいるくらいだから、講義が始まる直前に行ったところでまともに参加できないだろう。自分が受けたい講義は必ず前もって調べておきたまえ」
「わかりました」
「では、受講する際の注意点を一つ。教官への質問は一切禁止されている。講義中はもちろんその前後もだ。なにか疑問があるのならば、自分で解決するか学友たちと協力しなさい。ここには自分で調べられるだけの蔵書を備えた図書館も併設されている。自ら問題を解決できないようでは、ここの学生としてふさわしくないということだ。これはいかなる理由も認められない。違反した者は、即退所してもらうからそのつもりでいるように。わかったね」
これまで、にこにこ話していたシャーロックの表情が突然重くなり、口調も厳しく変化した。
「は、はい」
フェリクスは気圧されるように生返事を返した。
「さて、この後は君が暮らす学生寮を他のものに案内させようと思っているのだが、なにか質問はあるかね。大丈夫だ、いま質問しても違反にはならないからね」
ふはははは、とシャーロックは愉快そうに笑った。対照的にフェリクスの表情は険しかった。？質問禁止？こんな重要なことを医者は一切教えてくれなかった。
「どうやら質問はないようだね。では、案内のものを呼ぼう」
「お願いします」
二人とも立ち上がったところで、シャーロックが「おっ」と声を上げた。

「いかんいかん、とても大事なことを忘れていた。まいった、歳のせいかな」
広い額に指を二本当てて、自嘲しながら頭を左右に振った。
「ここでは百日置きに毎回試験が行われるのだ。内容は建築学だけに絞ったものではない。すべての分野から出題される。当然、君が受講したこともない分野も出題されるだろう。だが、条件は全員同じであり、そもそも学問とは必ずどこかでつながっているものなのだ。たとえば、建築学を究めるのに、哲学や言語学が必要ないということはあり得ないのだ。試験結果の下位十名には退所勧告をさせてもらう。もちろん拒否することはできない。君が三年間、ここでよく学び、無事卒業していくことを私は望んでいるよ」
要するに、成績の悪い学生から強制的に退所させるということだ。これも医者からは聞かされておらず、フェリクスは驚きを表情に出すまいと必死にこらえた。果たして自分はこの学問所で生き残っていけるだけの学力を備えているのだろうか。正直、本当に建築学を学びたいのかさえも、記憶を失ってしまっている今ではわからない。
「私からは以上だ。あらためて、アルキア学問所にようこそ。そして、入所おめでとう」
シャーロックから差し出された手に、フェリクスはふと我に返った。
「ありがとうございます」
慌てて手を握った。しわだらけの冷たい手だった。

（5）

学生寮は、思いのほか学問所から遠く離れたところにあった。なんでも歩くことは閃きを助長させるという研究結果が実証されたことで、わざわざ十数年前にここへ移転されたそうだ。

フェリクスにあてがわれたのは、二階にある一番奥の部屋だった。二段ベッドと二台の机が置かれてある二人用の部屋だが、同居者はいないという。

その理由は生活を始めてからすぐに気づいた。本来ここに入居するはずだった学生は、あの日森《丶》で《丶》殺《丶》さ《丶》れ《丶》た《丶》のだ。

フェリクスは隣の部屋の様子を探ってみた。案の定、空き室でその隣の部屋も同様だった。それどころか、この階に人が住んでいる気配がしないのだ。おそらくここは、フェリクスと同じ東部から集まった留学生たちのために用意された部屋なのだ。

その事実に気づいてしまうと、この部屋で暮らしていて、自分だけ生き残ってしまったことにどこか後ろめたさを感じることがあった。

だからといって、もし試験に落第し、退学させられるようなことになっては、それこそ死んだ仲間たちに面目が立たない。ここで三年間学びとおすことこそが仲間たちの供養になる、とフェリクスは考えるようになった。

だが、学問所で扱われる講義の内容はどれも一筋縄ではいかなかった。頼みの『建築術指南』を開いても書いてあることが理解できない。ところが、瀕死の状態になっても抱えていたほうには、多数の書き込みがされていた。残念ながら傷みが激しすぎて判読はできないが、きっと記憶を失う前のフェリクスは、入所前からこの本を読みこなせていたのだ。それならば、記憶がなくても脳は同じはず。今の自分に理解できないことはないはずだ、と奮い立たせ、毎日死

にものぐるいになって勉強した。
その甲斐あってか、徐々に講義の内容も理解できるようになり、一日の複数の講義を受講できる余裕も生まれてきた。
そんなある日、フェリクスは奇妙な体験をした。
その日の午前中は、『いかにして井戸に適した土地を発見するか』という内容の講義を選んだ。昨年からの水不足が続く今、新しい井戸の建設は急務であり、立ち見ができるほどの盛況っぷりだった。
いつもは、教官が話す一言一句も聞き漏らしてはならないと、常に気を張っているのが、この講義に限っては、意識しなくとも教官が言っていることが全部すらすらと頭の中に入ってきた。地下水が溜まりやすい場所の見分け方、地質、地層の調査などすべて瞬時に理解できるのだ。
フェリクスは講義の終盤、この不思議な感覚に一つの結論を出した。
――自分は、講義の内容をすでに知っている。
記憶を失う前に、故郷で学んでいたのだろう。実家のことも両親も友人の顔さえも未だに思い出せないが、そうとしか考えられなかった。
もしかしたら記憶が戻りつつあるのかもしれない。なにかをきっかけにすべてを思い出す可能性が高いと医者も言っていた。フェリクスはいつか記憶が戻ることを期待しながら寮と学問所を往復する生活を送った。
季節が変わり、最初の試験が目前に迫っていた。
「閉館の時間です。速やかに退館して下さい」
図書館の館員に声をかけられて、フェリクスは辺りがすでに暗くなっていることに気づいた。いつの間にか机上のランプに灯がともり、窓からは月の光が射し込んでいる。
勉学に没頭してしまうと時間の感覚を忘れ、周りの状況がまったく把握できなくなってしまうことも珍しくなかった。
積んでいた大量の本を慌てて脇に抱えて、元にあった本棚に戻す。

ここの本はすべて貸し出しが禁止されている。どうしても自分の部屋で勉強したければ模写するしかない。だが、模写には多大な時間と労力、そして根気を伴う作業であるから図書館に通い詰めるしかない。模写した本、つまり写本を売って、小遣い稼ぎにしている学生がいるという噂を聞いたことがあるが、手持ちの金がないフェリクスには関係のない話だった。

図書館を出て、学生寮への帰り道をいつもどおり歩く。今夜は満月が夜空に浮かんでいて、いつもより夜道は明るかった。

黄色く輝くまんまるい月に見とれながら歩いていたせいか、前方から足早に向かって来た障害《丶丶》に気づくのが遅れた。

はっと気づいたときには、マントに身を包んだ相手の体が目の前にあり、慌てて体を横に捻ったが、間に合わなかった。相手の肩が胸元にぶつかった衝撃で足元が揺れた。

「すみません」

フェリクスは咄嗟に謝ったが、相手は目もくれず、さらに歩の速度を上げるようにして遠ざかっていった。

よそ見をしていたこちらにも非はあるが、相手も目深にフードを被っている。あれでは、前方の視界も狭いはずだ。

フェリクスは、ムッとしながら、路地の角へと消えていく鳶色のマントの背中を睨んだ。

――鳶色のマント。

フェリクスは駆けだしていた。

相手はすでに角を曲がり、フェリクスの視界から消えていただけに、全力で走った。

鳶色のマントには見覚えがあった。フェリクスたち留学生団を森へ案内してくれた男がまとっていたものと同じだった。

角を曲がると、一瞬だけマントの端が見えて、また消えた。前方の角をまた右に曲がったようだ。

当然、フェリクスは後を追う。もし、あの男なら聞きたいことが山ほどある。

しかし、再び角を曲がったフェリクスの視界には、マントの姿は完全に消えていた。あとは勘を頼りに捜すしかない。きょろきょろと左右に首を巡らせながら小走りに辺りを走り回った。

ずいぶん長い時間捜し回ったつもりだが、疲労感からそう感じるだけで、実際は極短時間だったかもしれない。

もう無理だ。フェリクスは背中を丸め、両膝に手を当てたまま苦しそうにぜえぜえと喘いだ。

ここはどこだろう。闇雲に駆け回ったせいで、どうやら道に迷ってしまったようだ。記憶をたどりながらここまで来た道を戻るしかない。

ところが、すぐに右か左か、はたまた直進すべきかわからなくなった。人に道を訊けば解決するはずだが、こういうときに限って人通りがまったくない。

とうとうフェリクスは道の端にへたりこんでしまった。背中を建物の白壁にもたれさせ、両膝の間に顔を埋める。いっそこのまま眠ってしまいたい。それほどフェリクスは疲労困憊していた。

ふいに、辺りに暗い影が差したのに気づいてフェリクスは顔を上げた。煌々と地上を照らしていた満月に、いびつな形をした黒く大きな雲が一つかかっていた。ゆっくりとこの雲が月を横切ると、再び王都を明るく照らした。

そのときだった。月を見上げるフェリクスの視線の端に、鳶色の人影が一瞬だけ動いて、消えた。

そこは、斜向かいの建物、三階部分に並んだ窓の一角。フェリクスは、がばりと立ち上がった。

階段を一段昇るごとに感じる痛みをこらえながら目的の部屋へ急いだ。

三階にたどり着くと、一部屋だけドアがうっすらと開いていた。

フェリクスは唾を飲み込んだ。ここが、外から見えた鳶色のマントがいた部屋に間違いない。おそるおそるドアの隙間に顔を近づけた。

中は真っ暗で、物音一つしなかった。
「こんばんは。どなたかいらっしゃいませんか」
部屋中にフェリクスの声が虚しく響くだけで返事はなかった。
そんな馬鹿な。外から見たときは、間違いなく窓際に人がいたはずだ。
「道に迷ってしまって、少しお伺いしたいのですが――」
フェリクスは部屋に無断で入ることの言い訳をしてから一歩足を踏み入れた。その瞬間、足元から埃が舞った。
だんだんこの暗さに目が慣れてくると、部屋中の至るところに埃が積もっていることがわかった。これは人がここに長期間住んでいない証拠だ。ところが、生活に必要な調度品はすべて揃っている。枕つきのベッド、書きもの机と背もたれ椅子、ぎっしりと隙間なく詰め込まれた書棚、食器やランプが置かれた小棚など。埃が積もっていることを除けば、部屋はこざっぱりとしていて、よく整理されている。
この部屋の主はどこに行ってしまったのだろうか。奇妙に思っているフェリクスの興味を惹いたのは、この部屋で一番大きな棚だった。高さは天井すれすれまであり、横幅は、フェリクスが両腕を広げたくらいある。おそらく衣装棚だろう。いけないと思いつつも正面に付いている左右の取っ手に手が伸びていた。
開けるのには力がいった。腹に力をこめて思いっきり引くと、ようやく扉はぎいいいっと音を立てて左右に開いた。中からは、密閉された古い空気たちが、外界へと一斉に飛び出してきた。
あまりのカビ臭さにむせ返り、鼻と口を掌で覆った。涙目になって棚の中を見ると、大量の衣服が並んでいた。
――これは？
見覚えのある刺繍が施された衣服に手を伸ばしかけたとき、フェリクスの首に冷たい感触がした。
「ひっ」
フェリクスは声にならない悲鳴を上げて、派手に尻もちをついた。

冷たい感触の正体が、鋭い刃であることを認識して腰が抜けてしまった。
月光に照らされた剣先がフェリクスの喉元に突きつけられる。
「ひいいいいっ」
より声にならない声を上げ、唇はぶるぶると震えた。
「なぜお前がここにいる」
感情のない低い声が、フェリクスを問い詰める。
「答えぬならば、このまま剣をお前の血で染めることになるぞ」
青い眼が、フェリクスを睨みつける。この冷たい瞳をフェリクスは知っている。剣を突きつけているのは、騎士団のレリアだった。

（6）

「ち、ちがうんです。違うんです。違います」」
フェリクスは激しく頭を振った。
「質問に答えろ。ここでなにをしている」
レリアは最後通牒を告げるかのごとくゆっくり言った。
少しでも刃の恐怖から逃れるため、フェリクスは視線をできるだけ天井に向けた。落ち着け、落ち着け、自分はここに盗みに入ったわけじゃない。ここで説明できなければ殺されてしまう。
「レリア隊長、これは誤解です」
「ほう」レリアは僅かに首を横に倒した。「わたしがどんな誤解をしているのか説明してもらおうか」
フェリクスはごくりと唾を飲んだ。
「わたしはけっして盗みに入ったわけではありません。人を追っているうちに、この部屋へたどり着いただけなんです」
「人を追ってだと？」
レリアの表情が明らかに曇った。フェリクスは慌てて説明を付け加える。
「鳶色のマントを着ていたんです。わたしたち留学生団を森に案内してくれた男と同じマントでした」
「そして、この部屋に入ったと言いたいわけだな。それで、当人はどこにいる？」
「それがわからないです。わたしが部屋の前に着いたとき、ドアは開いていました。それで、部屋の中を覗いても誰もいなくて、つい入ってしまったんです」
重い静寂が立ち込めた。レリアは無表情のままじっとフェリクスを見据えていた。
「本当です。信じてください」
フェリクスは目を瞑って静かに言った。悪意はなかったとはいえ

他人の部屋に無断で入ってしまったことは紛れもない事実だ。どんな刑罰が言い渡されるのか、唇を噛んで待った。
「誰か、こっちに来てくれ」
レリアは視線をフェリクスに向けたまま外に呼びかけるように言った。
「隊長、お呼びでしょうか」
すぐにランタンを手にした一人の騎士が部屋の入口に現れた。
レリアは二歩三歩と後ずさると、現れた騎士と耳打ちを始めた。話の内容は、フェリクスの耳までは届かない。ただ、フェリクスに向けられた剣を鞘へ収めたとき、キンと金属音が小さく鳴った。
と同時に、騎士の男は持っていたランタンをレリアに手渡し、自らは再び廊下へと駆けだした。
自分への罰が決まったのだろうか。フェリクスは恐る恐る立ち上がろうとした。
「動くな！」
レリアの鋭い言葉が、フェリクスに突き刺さる。びくりと体が縮こまった。
「いいか、そこを一歩も動くな」
「は、はい……」フェリクスは泣きそうな声で返事をした。
レリアは姿勢を低くすると、ランタンの灯りを地面へ近づけ、慎重に観察を始めた。中腰の状態で、ゆっくり部屋の中を歩き回る。フェリクスは言われたとおり、指一本動かさずに黙ってその様子を眺めていた。
「ふむ」
レリアはフェリクスの目の前で軽く頷くと、すっと背筋を伸ばした。
「たしかに大きさの異なる足跡が三つある。わたしとお前と、何者かのだ」
そうか、床に埃が積もっているお陰で、足跡が残っていたんだ。
フェリクスは安堵の息を漏らした。とりあえずは信じてもらえた

ようだ。
「わたしは、どんな罰を受けるのでしょうか」
レリアは目にかかった一筋の前髪を人差し指で払ってから言った。
「ここに二度と近づくな。もちろん、今夜のことを他言することも一切禁止する。それが約束できるならば、不問にしよう」
レリアの意外な言葉にフェリクスは一瞬ぽかんと口を開けた。彼女の眉間にしわが刻まれたのに気づいて、慌てて首を何度も縦に振った。
「もちろんです。今日のことは絶対に他言しません。お約束いたします」
「ならば、さっさと寮に帰れ」
レリアはドアの方を顎でしゃくった。
「はい」
フェリクスは、さっと立ち上がると逃げるようにして部屋を出て、階段を駆け下りた。脚の痛みなどすっかり忘れていた。
建物の外に出ると数多くの篝火(かがりび)が焚かれ、辺り一面がオレンジ色に照らされていた。険しい表情をした騎士たちが建物の周りを取り囲み、さらには多くの騎士たちがゆらゆらと揺れる炎の間を忙しなく動き回っている。
これだけの騎士たちを動員してまでも、騎士団は鳶色のマントの男を見つけ出したがっているのだ。もし、あの男が生き残っているとしたら、森で留学生団を襲ったのは何者なのか、すぐにでも真相が掴めるからだろう。
いや、本当にそれだけが理由なのだろうか、ふとフェリクスは疑問に思った。
旅人が賊に襲われることはけっして珍しいことではない。いくら王都近郊で起こったこととはいえ、騎士団の力の入れようには異常さを感じる。だとしたら、騎士団の本当の狙いはなんなのか……。
「おい、なにを突っ立ってるんだ」
野太い声がフェリクスの思考を邪魔した。前方に目の焦点を合わ

せると、どすどすと音を立てて大股で向かってくる大男の姿があった。見覚えのある厳(いか)つい顔。たしか名前をファティウスと言った。
「どけ！」
ファティウスの右手が伸び、乱暴にフェリクスの体を薙いだ。あまりの怪力にいとも簡単にフェリクスは横転してしまった。
ファティウスは倒れたフェリクスに一瞥も与えることなく、建物の中へと消えていった。
「痛ててて」
上体を起こして、倒れ込んだ側の右肘を見ると血で赤く染まっていた。
「早く行け、騎士団の邪魔だ」
見かねたように騎士の一人がフェリクスの腕に手をかけて抱え起こした。
「は、はい。そうしたいのはやまやまなんですが……」
立ち上がったフェリクスは気まずそうに、そして気恥ずかしそうに告白した。
「帰る方向がわからないんです」

（7）

試験前日の夜、いつもは朝方まで机にかじりついているのだが、さすがに今日くらいは早めに休もうと準備をしていたところに、来訪があった。

フェリクスを治療してくれた医者だった。

「そうか、明日が試験か。悪い悪い、日にちを勘違いしてた」

ちっともすまなそうに言うと、医者はフェリクスが使っていないほうの机の上に腰を載せた。

「ほら。お土産だ」

医者は麻紐でくくった本の束をフェリクスに差し出した。

なんだろうと、フェリクスは紐を解く。

「すごい。いいんですか、これもらっても」

フェリクスは目を輝かせた。医者が持ってきたのは、医学に関する写本だった。十冊以上はある。

「ああ、もちろんだ。部屋中をひっくり返して探したんだが、これだけしか見つけられなかった。おかしいな、学生の頃はもっと勉強していたつもりだったんだがなあ」

はっはっはっと、胸を張って高笑いを始めた。

「ありがとうございます。助かります」

「どうだ、もう生活にはなれたか」

医者は値踏みするかのように、視線を部屋のあちこちに巡らせた。

「へえ、けっこう頑張ってるみたいじゃないか。百日足らずで、これだけ学術書の写本があるなんて。友達もたくさんいるみたいだな」

机の上、棚に置かれた書物を見て、医者は感心したように言った。

「いいえ、友達は一人もいません」

フェリクスは思わず苦笑した。

「嘘つけ。一人でこれだけ写本を作れるか」

「嘘じゃありません。難解な部分を抜き出しているだけで、どれも

中途半端なものです。未だに他の学生たちからは避けられいますよ」
唯一の生き残りなんて、気味悪がられて当然なんですけどね、と自嘲するように付け加えた。
「そうか……」医者はバツが悪そうに、視線を宙にさまよわせた。
「まあ、気にするな。俺も最初の試験まではそうだったよ。百日ごとに十人ずつ退学させられるなんてな、聞いたときは青天の霹靂さ。当然、周りは全員敵に見えてくる。でも安心しろ。敵と思うよりも味方と思って、協力し合ったほうが得だってことに遅かれ早かれ気づくから」
「そうですね。そうなればいいですね」
「優秀な奴ほど周りに人は集まってくる。大丈夫だ、これだけ勉強している奴は、俺の代にもそうはいなかった。明日の試験で、他の奴らの度肝を抜いてやれ」
医者は、拳を作って軽くフェリクスの胸を小突いた。
「邪魔したな。落ち着いたら一度、医療所のほうにも顔を見せてくれよ」
「はい。いい報告ができるように頑張ります」
医者が去った後の部屋はいつものようにしんと静まりかえった。
明日の試験は十時間にも及ぶ長丁場で、それも一発勝負だ。寝不足や体調不良が原因で、試験の途中で事切れてしまっては洒落にならない。
明日までに必要なものは睡眠だけだ。フェリクスは横になった。しかし、ちっとも眠くならない。しかたなく、燭台に灯りを点して医者がくれた書物を物色し始めた。
その中に、気になる表題を見つけた。
『メフィス人―緑色の眼を持った古代人―』
レリアから尋問されたときに、緑の眼を見なかったか、と訊かれたことをフェリクスは憶えていた。
燭台をベッドの横に移動させて、フェリクスは本を開いた。ベッドの上で脚を伸ばし、壁にもたれかかった楽な姿勢で文字を追って

いれば、そのうち眠くなるだろう。そんな軽い気持ちで読み始めた。
著者の研究によれば、太古の昔よりこの地には「メフィス人」と呼ばれる古代人が繁栄していたそうだ。
彼らは、森の中で生活することを好み、狩猟採集を行っていた。小規模ではあるが、畜産を行い、食用の植物も育てていたようだ。その痕跡が、王都周辺で発見されているとして具体的な地名が多数挙げられていた。
狩りで主に使われた武器は、硬い幹で作られた長さ一メートル強の棍棒と毒を染みこませたナイフだった。ナイフといっても、彼らは鉄の精製技術を持っていなかったため、実際は石の破片を鋭く磨いたものだった。だが、これらの武器をけっして侮ってはならない。棍棒は、鉄製の剣よりも軽くて扱いやすい分、使いこなせば強力な武器になる。一発で頭蓋骨を破壊できるほどの威力は充分に備えているのだ。また、弓矢の技術を持たない彼らの飛び道具がナイフだった。その投擲技術は非常に優秀で、すばしっこい小動物さえも百発百中で仕留めたという。
なかでも武器の扱いに長けた者たちは、戦士と呼ばれ、他民族間の戦争では大いに力を発揮した。特筆すべきは、戦士の大半が女性だったということである。
我々とは違って、メフィス人は男よりも女のほうが身長・体重ともに戦闘向きであったのだ。当然、狩りも女性が中心になる。自然界には、蛙や蟷螂のようにオスよりもメスのほうが体が大きい生物はけっして珍しくはないのだが、人間に置き換えてみると、すぐには信じてもらえないだろう。だが、これも各地で遺骨が発見されており、疑いようのない真実なのである。
では、女が狩りや戦に出かけている間、男はなにをしていたのか。育児や料理、編み物をしていたのだろうか。驚くべきことに、子作りを終えた男は、殺処分されたようだ。メフィス人にとって、男は子孫を残すこと以外は無用の存在であり、まさに女中心の組織が形成されていたのだ。

メフィス人の女性には、大きな特徴がもう一つあった。それが、緑色の眼である。女性だけが子供を産める機能を持つように、メフィス人の女性はすべて緑色の眼を持って生まれる。一方、男が緑色の眼を持つことはない。

「緑の悪魔」と他民族から怖れられたメフィス人たちは戦を繰り返すことで勢力を拡大し、やがて巨大な都市を森の中に築いたという。

しかし、時が過ぎ、森の外側では「鉄」が生み出されていた。鉄製の剣や甲冑、鏃など強力な武器を携えた軍団の侵略を受け、壮絶な死闘を繰り広げたが、ついには敗走することになる。

軍の中心人物であったアルキアは、国王の座に就くと同時に、広大な森の大部分を焼き払った。だが、最後の生き残りと思われるメフィス人たちが逃げ込んだ森だけは、計画通りにはいかなかった。森の中は一年中、霧が濃く、水分をたっぷり含んだ新緑が密生している。これでは火が燃え広がらない。大量の兵士を派遣しても、高低差が激しく霧で視界が悪い森奥から還ってくる者はいなかった。

それでも国王は、メフィス人絶滅を完遂するため、森の近辺に王都を建設したのだ。しかし、何度兵士を送っても結果は同じだった。およそ八十年経った現在でも、森は残ったままであり、果たしてメフィス人の子孫が生き残っているのかさえもわからない――。

本に書かれてある内容を要約すれば、およそこんなところだろう。結局、一冊丸ごと読んでしまったフェリクスは、そっと本を閉じた。

アルキア王が百年前に建国して以来、メフィス人は歴史の表舞台には一度も現れていないという。そもそも本当に、メフィス人は存在していたのだろうか。この著者が根拠として挙げている資料の信憑性がわからない。

しかし、森に入った兵士たちがことごとく失敗し、命を落としていることは事実であり、命からがら帰還した数人が口をそろえて「緑の眼をした人間に襲われた」と証言していることは見落とせない。

そして、なによりも興味深い一文があった。

「国王は、忌まわしき森とメフィス人を根絶やしにするために、精

鋭たちを集めた騎士団を設立あそばせられた」
森で二十人以上の死体が見つかったと聞いたレリアが、もしやメフィス人の仕業では、と疑ったのは容易に想像がつく。だから、緑の眼を見なかった、と訊いてきたのだ。それに、あの森を自由に行き来できるとしたら、それはメフィス人でしかあり得ないのではないか。
だとすると、あの鳶色のマントの男は、メフィス人だったのだろうか。男ならば、緑色の眼をしていないはずだから、王都の人間とも区別はつかない。いや、本当に男だったのだろうか。憶えているのは声であり、顔ではないのだ。メフィス人の女性が、男同様の体格をしているのならば、声だって低音の、いわゆる男声の可能性もあるのではないか。
あの日のことを思い出そうといくら記憶をたどっても、体が拒否するかのように、決まって全身が粟立ち、がたがたと震えだすのだ。仲間たちの悲鳴だけが、永遠と頭の中を反響し続けるのは、三ヶ月以上経った今でも変わらない。
小鳥のさえずりが聞こえ、夜が明けたことに気づいた。間もなく、学問所の鐘も鳴らされることだろう。フェリクスは眠ることを諦め、朝食の準備を始めることにした。大丈夫、しっかりと目は冴えている。

（8）

――以下、十名の者、国王陛下が設けられし学問所で学び続けたるには、分不相応。よって、退学処分とす。

掲示板に張り出された一枚の小さな紙の前でフェリクスは立ち尽くしていた。

列挙された十名の中に、自分の名前があったからだ。なにかの間違いではないか、と一文字一文字綴りを確かめたが、無駄だった。おまけに、ご丁寧に名前に続けて、（東部代表）とまで記されている。これで、同姓同名の可能性もなくなった。

それでもまだ、この結果はフェリクスにとっては受け入れがたいものだった。試験の手応えはたしかにあった。試験中、大勢の生徒が頭を抱え込み、手を止めてしまってもフェリクスだけは最後までペンを走らせ続けることできたのだ。それなのに、どうして自分が退学させられるのか。

どれだけの時間が過ぎたのだろう。退学を免れ、歓喜の声を上げていた学生たちの群れも今は誰一人としていない。

――くそっ！

フェリクスは走り出した。

一目散に教務棟の中へ駆け込むと、腹の出た警備の男が両手を広げて立ち塞がったが、フェリクスは構わず突っ込んだ。

「またお前か」

男は、脇をすり抜けようとするフェリクスの体を腕で挟み込むと、自分の体重を活かして床に押さえ込んだ。

背中から圧迫されて「うっ」と息が詰まる。それでもフェリクスは、もがくように両手足をばたつかせながら叫んだ。

「副学長に会わせてくれ！」

「うるさい」

男の拳を顔面に受けて、一瞬意識が飛びそうになる。つうっと鼻

から温かい液体が流れ始め、口の中に入ると鉄の味がした。
フェリクスは奥歯に力をこめて、勢いよく頭を振り上げた。がつんと衝撃があって、あうううっと男から嗚咽が漏れた。
男が一瞬怯んだ隙に、フェリクスは立ち上がり、目の前の階段へ駆けようとした。ところが、踏み出そうとした右足が前に動かずに、前のめりに倒れそうになった。首だけで振り返ると、男が倒れながらも伸ばした右手で、しっかりとフェリクスの足首を掴んでいた。
「ちくしょう、離せよ」
フェリクスが叫んだそのとき、
「なにをしている！」
荒々しい声が上がった。騒ぎに気づいたのか、左右の廊下から警備の男たちが、険しい形相でこちらへ駆けてきていた。フェリクスは、男の手を振りほどこうと右足を振り回したが、男は離さない。瞬く間に駆けつけた四人の警備に囲まれたフェリクスは両手を後ろに捻り上げられた。
さらに腹部にも強い衝撃を加えられ、フェリクスは膝から崩れ落ちた。息が詰まり、激しく咳き込むと、鼻血と唾液が垂れて、顔が映るほどきれいに磨き上げられた廊下を汚した。
「やっと、おとなしくなりやがった」
頭突きを喰らった男が、赤くなった鼻をしきりに指で擦りながら言った。
「こんなガキにやられるようじゃ、鍛え直したほうがいいんじゃないか」と他の男が茶化した。すると、他の男たちも「そうだそうだ。太りすぎだ」と声を合わせて嘲け笑った。「うるせえ」と忌々しそうに返す男たちのやりとりをフェリクスは耳にしながらなんとか顔を上げた。
「頼むから副学長に会わせてくれ」
「まだ言うか、こいつ。どうせ、シャーロック様への逆恨みだろうが」
「違う」フェリクスは即座に、そして強く否定した。その意識の強

さに、男たちも一瞬びくりと首筋を強張らせた。
フェリクスは、もう一度「会わせてくれ」と繰り返した。
「うるさい、黙れ」
男が拳を作って、振り上げようしたときだった。
「どうしたのですか？」
低い穏やかな声が聞こえた。
声の方向にフェリクスは目をやると、白生地の所々に金色の刺繍が入ったローブを纏ったシャーロックがゆっくりと階段から下りてきていた。
「シャーロック副学長、お願いです。わたしの話を聞いてください」
「なんだ、君か」
フェリクスを見たシャーロックは、面倒そうに表情を歪めた。
「残念だが、これから私は出かけるところだ。君の相手をしている暇はない」
冷たくあしらうように言うと、シャーロックはフェリクスから視線を外して、出入口のほうへ歩を進めた。
「待ってください」
横を通り過ぎようとしているシャーロックに駆け寄ろうしたが、四人の男たちから四方を押さえられた今の状態では、一歩も動けなかった。
「どうか、わたしの答案を、点数を教えてください」
フェリクスの必死の訴えに、シャーロックは鼻で笑って返した。
「ふん。創立時から順位以外はすべて非公開と決まっているのだ。なぜ君一人だけ例外を認めなければならない。諦めたまえ」
もはや一瞥をくれることもなく遠ざかっていくシャーロックの背中に向かってフェリクスは声を張り上げた。
「そんなに俺が怖いのかよ！」
シャーロックの足がピタリと止まる。
「お前、なんてことを」口を押さえ込もうとした警備の指を噛んで、フェリクスは言葉を続けた。

「あんたは、唯一の生き残りで、おまけに記憶まで失っている俺のことが怖くてしかたないんだろ。他の学生たちにも事前に俺の素性を報せてたんじゃないか、そうだろ！」
シャーロックは肩越しに振り返り、フェリクスを睨みつけた。眉間にしわが寄り、目尻が吊り上がった表情は、とても紳士とは思えない醜いものだった。
「お前、誰に向かって口を利いているのか、わかっているんだろうな」
顔を真っ赤に変色させたシャーロックは、ぶるぶると唇まで震わせた。
「その顔は図星と言っているようなもんだ。なにが最高学問所だ。ここはそんな汚いことをするのか。俺を排除するよう命じたのは誰だ。学長か、あんたの判断か」
「黙れ！」
シャーロックは唾を飛ばして怒鳴った。
「もう我慢ならん。こいつは、学問所を愚弄した。それは、人材の育成に尽力されておられる国王陛下を侮辱したも同然だ。お前たち、こいつにその罪の重さをわからせてやれ」
「はい」
警備の男たちは嬉々とした表情を見せた。殺しの許可を得られて、早くも胸が踊っているようだ。
完全に口を塞がれてしまい、これ以上なにも言うことができないフェリクスだったが、これで満足だった。ここを退学となった後の人生などなんの意味もない。
「くそ、時間を浪費してしまった。あとは任せたぞ」
シャーロックは忌々しそうに言って、出入口の扉を開けた。
「あ、これはこれは」
突然、シャーロックが猫撫で声を発した。フェリクスの位置からは、逆光でよく見えないが、どうやら扉の前に誰かいるようだ。
「レリア隊長ではございませんか。どうされました」

「暴れている男がいると騎士団に報せがあって来たのだ。入るぞ」
シャーロックを押しのけるようにして、レリアは中に入った。部下の騎士たち三人も後に続く。
「ちょうど私どもの警備が取り押さえたところです。お騒がせして申し訳ございません」
「そうか」
レリアはフェリクスの前で足を止めると、相変わらずの無表情でじっと彼を見つめた。フェリクスもレリアから視線を逸らさない。先日の夜の出来事といい今回といい、またレリアが現れた。もはやただの偶然とは思えない。
「ならば、あとは騎士団で処罰しよう。おい、こいつを捕縛しろ」
命令を受けた騎士たちは、手際よくフェリクスの両腕と両手首を麻縄で縛った。
「そんな。わざわざお忙しいレリア様たちのお手を煩わさずとも私どもが」
シャーロックは、おろおろしながら半ば懇願するように言った。それもそのはずだ。彼にしてみれば、退学の真相を知ってしまったフェリクスは、けっして生かしてはおけない存在なのだから。
「安心しろ。事の次第はすでに把握している。相応の罰は与えよう」
「はあ、ですが、しかし――」
なおも引き下がろうとするシャーロックをレリアはじろりと見据えた。
「そんなに我々騎士団に一任するのが不満か」
「いえ、とんでもございません」
シャーロックは震える声で、慌てて頭を振った。レリアはその答えに満足したように、ようやく彼から視線を外した。
「よし、連れて行け」
ぐいっと縄を引っ張られて、フェリクスは教務棟から外に連れ出された。僅か百日にも満たなかったフェリクスの学生生活は、このとき終わった。

（9）

熱にうなされて、フェリクスは目を覚ました。体が燃えるように熱い。冷たい水を頭からかぶれればどれほど楽になれるだろう。しかし、水不足が続いている王都でそんな贅沢ができるはずもない。ましてや、ここは地下牢の中。フェリクスは監禁されている身なのだ。

「あうっ」フェリクスの口から嗚咽が漏れた。背中の痛みに耐えかねて上半身を起こした。

牢屋の中は、大人一人が横になれるほどの広さしかなく、周りは石壁で固められている。ちょうど目の高さに、小さな格子窓が取り付けられていて、その向こうに蝋燭の火が一本揺れているのが見える。地下に位置するこの牢では、頼れる明かりはそれしかなく、一日中暗闇に覆われている。

騎士団により学問所から城の地下牢へと連行されたフェリクスは、即刻、鞭打ち三十回の刑が言い渡された。

天井から下げられた手枷に両手を縛れられた恰好にされ、鞭を手にした拷問官から胸部を十五回、背中から十五回打たれた。ピシッと鞭がしなるたびに、耐え難い痛みが体中を駆け巡った。皮膚は剥げ、みるみるうちに赤く腫れあがっていった。刑の途中で意識を失ってしまったため、平手打ちも喰らった。刑の最中に意識を失うことは禁止されているらしい。

鞭打ちが終わって、フェリクスは牢屋に監禁された。ごつごつとした粗雑な石畳みが敷かれただけの部屋には、微かに排泄物の臭いも漂っている。

地面に寝転びたいところだが、打たれた背中の腫れがひどくて、硬い石畳みの上では横になれない。しかも、時間が経つにつれ、皮膚はますます腫れあがり、全身から汗を噴き出すほどの高熱を出し始めた。だからといって、医者を呼んでもらえるはずもなく、水や

食料が与えられることすらない。高熱で意識が朦朧とし、ついには気を失ってしまった。しかし、体を横にした瞬間に、痛みで意識が戻ってしまう。再び高熱の苦しみに悶えるうちに、意識を失うのだがまた激痛で目覚めてしまう。これを一晩のうちに何度も繰り返した。この刑の本当の苦しみは、鞭打ち時の痛みではなく、気を失うことすら許されない熱の苦しみにあるのだと、フェリクスは顔を歪めた。

牢屋に入れられて、三度目の夜が訪れていた。これまでまともに眠れていなかったが、多少腫れが引いたことで、ようやく体を横にできた。横になったフェリクスが本格的な眠りに落ちるまでほんの一瞬だった。

フェリクスの目の前に男の子が立っていた。年の頃は五、六歳といったところだろうか、肩で息をしながら剣を構えている。剣といっても、鉄製のものではなく稽古で使われる木剣だ。それでも、その幼子には大きすぎるように見えた。

「さあ、打ってこい」

男の子が見据える先に、均整のとれた体格の男が立っていた。口元に一筋のしわがあることからそう若くはないようだ。男は右手に木剣を握り、険しい表情を男の子に向けている。

「やあああああ」

男の子は威勢よく声を上げ、構えていた木剣を振り上げながら男に向かっていった。しかし、剣を振り下ろす前に、男の木剣が男の子の首筋に打ち込まれる。痛みで動きが止まったところに、容赦なく次の一撃が鎖骨の辺りに加えられた。

「まだ、剣の間合いが掴めないのか。やり直しだ」

男は、激痛に顔を歪め、うずくまっている男の子を見下ろして、怒りをぶちまけた。

「いつまで痛がっている。早くしろ」

今度は足蹴りをした。その衝撃で、男の子は、地面の上で体を一

回転させた。土埃にまみれた男の子は、憎悪の込められた眼で、男を睨み仰いだ。とても五、六歳の子が見せる表情とは思えず、フェリクスの背中に冷たいものが走った。

「そうだ、その眼だ。初めから私を殺すつもりでやれ。さあ、こい」

ゆらりと立ち上がった男の子は、構えなど見せずに突然「がああああああ」と雄叫びを上げて、男に斬りかかった。

その剣を男が剣で受ける。「そうだ。その間合いだ」と褒めたが、次の瞬間には「振りが大きい」と声を荒げて、顔面を剣で打った。

鼻血が流れるのも構わず、男の子は男に剣を振り下ろし、何度か剣が交わった。

「いいぞ、もっと力を込めろ」

熱を帯びた口調で男は声を張り上げ、これまでにない速さで剣を突いた。避けきれず、男の子の喉元に剣先がまともに入った。これには堪らず、剣を落としてむせいだ。

だが、男は「剣を拾え」と冷たく言い放った。男の子はなんとか呼吸を整えると、再び剣を構え、男に向かっていく、そして打たれる。

何度も何度も同じことが繰り返され、男の子の顔は赤や紫に腫れ上がり、腕や太腿にも内出血の痕が目立った。まるで、鞭打ちの刑を受けた直後の自分の体みたいだとフェリクスは思った。

「今日はこれまでにしよう。あとは好きな学問でも勝手にやれ。だが、けっして忘れるなよ。この世の中、学問だけでは生きていけない。生き残るには力が必要なのだ」

そう言うと、男は背を向けて去っていった。

男の姿が見えなくなったところで、男の子は、初めて腕で目元を拭った。

「なあ」フェリクスは男の子に歩み寄った「君の名前は？」

男の子はうんともすんとも言わなかった。それどころか、フェリクスのほうを見ようともしない。

フェリクスはやきもきして、男の子の両肩に手をかけ、じっと相

手の目を見た。すると、自分でも思いがけない言葉が口をついた。
「君は俺なのか」
そこで、目が覚めた。いや、正確には起こされたのだ。
「さっさと起きろ！」
うっすらとまぶたを開くと、視界に看守の姿が浮かび上がった。
「お前の刑は終わった。外へ出ろ」
襟首を掴まれて、乱暴に体を起こされた。そのまま、有無を言わさず牢屋の外へと引っ張られた。一階に続く階段を昇ると、窓から陽の光が差し込んでいて、三日ぶりの太陽は目に痛かった。
出口で、所持品を返された。といっても、『建築指南術』の本一冊と亜麻で織られた上着一枚だけだ。
「さあ、早く行け。また悪さしてここに戻ってくるなよ」
看守は、ここを出ていく全員に向けて言っているであろう常套句を口にして、フェリクスの背中を押した。
これからどうすればいいのだろうか。学問所でシャーロックに食ってかかったとき、死ぬ覚悟はできていた。まさか、こうして王都を歩くことができるとは思ってもみなかったのだ。
とぼとぼと歩いているうちに気がつけば、寮の前にいた。階段を昇り、自分の部屋へ向かう。すると、部屋の前に大きな白い袋が置かれていた。袋の口は紐で締められているが、フェリクスは躊躇することなく、紐を緩めて口を横一杯に広げた。
袋の中には、この百日間でフェリクスが書き写した本がぎっしりと詰まっていた。つまり、私物を持って出ていけ、と指示しているのだ。当然、ドアには鍵がかけられていて、中には入れない。
フェリクスはたまらずその場にしゃがみこんだ。住む所もなく金もない。ならば、故郷に帰るしかないのか。しかし、どうやって。運河が使えない今、陸路での一人旅は無謀すぎる。故郷にたどり着く前に、賊に襲われて終わりだ。王都(ここ)に残ろうが残るまいが、どっちみち死ぬだけじゃないか。
途方に暮れて、天井を見上げると、一匹の黒い虫がカサカサと音

を立てながら這っていた。あんなに醜い小さな虫でも生きるために走り回っている。

ここで生き残る術を探すんだ。

(1)

商店が建ち並ぶ通りにフェリクスは向かった。この袋一杯に詰まった本を売れば、いくらかは手に入るはずだ。

とにかく、ぐうぐうと鳴り続ける腹を満たしたかった。牢に監禁されていたときは、朝晩に一切れのパンと僅かな水が与えられただけだった。これ以上まともな食事をとらないのはさすがにまずい。現に、書店に着くまでの間に足元が何度かふらついた。

すべての本にざっと目を通した店主は、渋面を作って、

「そうだねえ、全部で銅貨五十枚ってところだね」

自分のぷっくりした二重顎を撫でながら言った。

「たったの……」

フェリクスは驚きと落胆で目を見開いた。毎日図書館に通い詰めた結晶が、銀貨一枚の価値にも満たないとは。思わず言葉を失ってしまった。帰郷するには、食糧と宿、それに傭兵の雇用など、どう少なく見積もっても銀貨十枚は必要なはずだ。銅貨五十枚では宿に一泊しただけで、その大半を失ってしまうだろう。

「不満なのはわかるがね、ほとんどが中途半端な写本じゃないか。これじゃ、売り物にならないよ。まともな値がつくのは、こいつくらいだね」

店主は、とんとんと本の束を指で叩いた。医者がくれた医学書だ。

「今は異国から入ってくる物語が人気なんだよ。学術書は、学生しか買わないからこっちとしても扱いが難しいんだよ」

「そうですか」

フェリクスは嘆息した。店主が指摘したとおり、これらは売るためではなく自分のために要点だけを写したものだ。他人には価値がないと判断されてもしかたがない。

「まあそれでも、正式な書写官が刊行したものなら値は張るんだけどねえ。にいちゃん、そんなの持ってないのかい」

「それなら」
フェリクスは懐から『建築術指南』を取り出した。店主は一目見るなり「ほう」と息を漏らして身を乗り出した。「み、見せてくれ」と明かに声の調子が変わった。本を手に取るなり興味深げにページをめくり始めた。
「こいつは本物だ。これなら銀貨五枚は出してもいい」
「そんなに！」
他とは比べものにならないほどの高値にフェリクスは思わず声を上げた。
「そりゃあ、素人の写本とは質が全然違うよ。書写官のものは、文字も秀逸で、誤字脱字もない完璧なものだ。どうだい、売ってくれるかい」
店主は鼻息荒く訊いてきた。
「え、と……」フェリクスの胸中にためらいが生まれた。退学させられた今、これはもう必要のないものだろう。しかし、在学中はずいぶん世話になった。建築学の基本的知識がすべて網羅されているこの本を肌身離さず持ち歩いていたのだ。嫌でも愛着が生まれるというわけだ。それに、これはレリアがくれたものだ。売ってしまうのは、彼女の恩を蔑ろにする行為のようにも思えた。
「さあ、どうなんだい」
焦れたように要求してくる店主に向かってフェリクスは首を左右に振った。
「すまない。これは売れないんだ」
銀貨五枚では、どちらにせよ帰郷できない。ならば、迷いがあるうちは売ってしまう必要もないだろう。
「それなら、銀貨六枚出そう。言っておくけど、他の店を当たっても五枚以上出すところなんてありゃしねえよ」
商売人は、人の心をぐらつかせるのが本当にうまい。誘惑に負けないよう気を取り直して、断ると、間髪入れずに「銀貨七枚」と声が飛んだ。また心が揺れるが、断る。とうとう最後は銀貨八枚と銅

貨五十枚を提示されたが、それでも首を縦に振らないフェリクスに、とうとう店主は「チッ」と舌打ちをして諦めた。

結局、ここでフェリクスが手に入れたのは、銅貨五十枚だけだった。それでもその大半が医者のお陰で手に入ったものだ。心の中で、「先生、ごめん」と医者に謝りつつ店を後にした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1084w/

王都に生きる滅亡の記憶

2011年12月11日14時54分発行